さあ授業をしに、
森林へ行こう。

小学校のための・
森林環境教育ガイドブック・体験編

子どもをつれて森に行きたくなる本

林野庁
北海道森林管理局
石狩地域
森林環境保全
ふれあいセンター

子どもをつれて森に行きたくなる本
林野庁北海道森林管理局石狩地域森林環境保全ふれあいセンター

森林へ行こう。
授業しに、行こう。

ちょっと見方を変えると
森林の中は教材の宝庫。
この本を道しるべに、
森林での授業を試してみてはいかがでしょう？

●この本の案内役●

北海道のある町の公立小学校の先生と児童が
みなさんをご案内します。

子どもをつれて
森に行きたくなる本

もくじ

発行によせて
さあ、森林の中へ
子どもと出かけてみましょう。 2

知って得する
森林の七つの効用 3

賢く、簡単に
国有林を使おう 15

森林に行く前に
知っておいて
ほしいこと 22

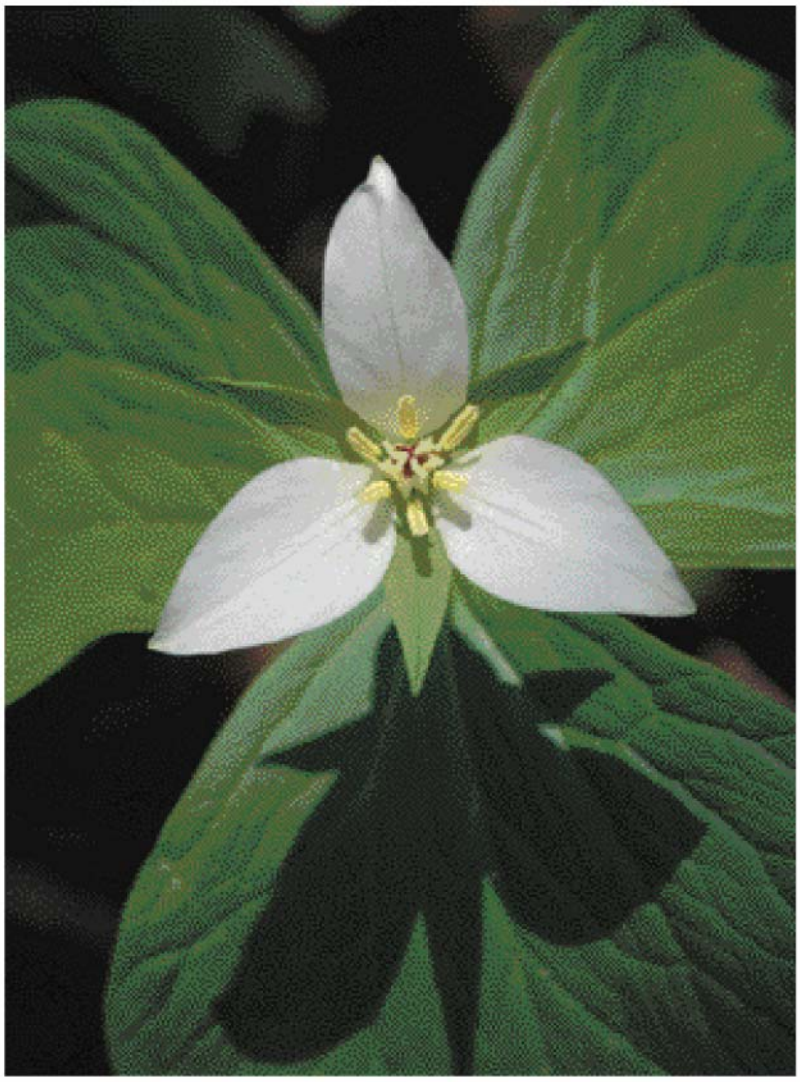
特選 プログラム事例集
例えばこんなプログラム 29

森林環境教育の最前線
ふぉれすと鉱山 54

ボランティアと一緒につくる
自然体験型授業 56

使える小ネタ集 58

ボランティアと一緒につくる
自然体験型授業 60



さあ、森林の中へ子どもと出かけてみましょう。

林野庁 北海道森林管理局
石狩地域森林環境保全ふれあいセンター所長
猪股英史

アメリカの作家で海洋生物学者でもあるレイチェル・カーソン氏は、自著の「センス・オブ・ワンダー」※の中で「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。」「もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。」「妖精の力にたよらないで、生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。」「消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。」と述べており、年少期における自然体験の重要性とその高い教育的効果について示唆するとともに、子どもたちが体験する自然に接したときの発見の喜びや驚き等の感動を共有できる大人の存在の必要性を挙げています。

確かに、森林を対象にした私たちのこれまでの自然体験活動の経験から、自然(森林)環境の中で非日常を直接体験することを通じて参加者も案内役の私たちも、お互いが楽しみながら、また、仲間への思いやりを意識しながら、自然や森林のことについて様々に感じ学ぶことができると考えています。

私たちは、とりわけ幼児期における自然環境の中での体験の重要性を踏まえ、平成17年3月に、身近な自然環境としての森林をフィールドにして一過性の体験行為に終始せず、段階的、発展的に体験・学習できるプログラムづくりの第一歩として、幼児期の子どもを対象に、「もりのなかでこどもはかがやく」と題する森林環境教育ガイドブックを発行しました。そして今回、幼児期における自然体験が小学生になっても生かされるよう、森林の中で体験ができるものにすること、また、小学校等において森林環境教育を行う際のよき参考となり、活用しやすくすぐに利用できる実践的なものにすることを目標に、小学生を対象にした事例集の編集に取り組みました。

本プログラムの特徴は、(1)身近な森林を活用した種々の活動種目を多数掲載するとともに、それぞれのねらい、プログラムの流れ、プログラム作成の際のポイントを明らかにしていること、(2)活動の場所として、「国有林」の利用方法について紹介していること、(3)札幌市等における比較的利用のしやすい森林公園等を紹介していることです。

本書が子どもたちと一緒に森林へと出かけるきっかけとなり、森林の中で子どもと大人が一緒に楽しみながら、森林の中で輝く子どもたちの感性にふれ、様々な発見の喜びや感動を共有することができれば幸いです。

なお、本書は、札幌大谷第二幼稚園の齊藤千代園長、江別市立野幌小学校の澁谷重昭校長、環境学習フォーラム北海道の藤田郁男代表、北ノ森自然伝習所の三木昇主宰、NPO法人ねおすの宮本英樹専務理事、同伊藤輝之ディレクター、同檜山知弘氏による多大な御尽力によって作成することができました。関係各位に衷心より深謝申し上げます。

※「THE SENSE OF WONDER（センス・オブ・ワンダー）」（レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳、23～26P、新潮社、1996年）

知って得する

森林の七つの効用

■森林で子どもたちは癒されるの？

■森林の中ではケンカが起こらない？

■子どもの集中力が高まるの？

■多様性が育つと何がいいの？

■慈しむ心はどうやって育つの？

「森林に行ったら何がいいの？」
って思うでしょ？
森林には子どもにも、先生にも良いことが
実はこんなに、あったんです！

■森林で体を鍛える？

■コミュニケーションが良くなるってホント？

■森林で作られる
人間関係って？

学校教育の中の森林

学校のカリキュラムとして森林での学習を取り入れている小学校は少ないと言える。江別の野幌小学校で森林学習を実践してきた澁谷先生は、森林を教育現場とすることに何を感じたのだろう。

背後に世界的に貴重な森林を有する小学校

江別市立野幌小学校校舎の裏手には、大都市札幌市、江別市、北広島市にまたがる2000haという広大な面積の森林があります。この森林は、オーストリアのウィーンの森やフランスのフォンテンブローの森と共に世界的にとても貴重な平地原生林なのだと言われています。

野幌地域は、今から120年前、新潟県から移住してきた北越殖民社の方々が開拓しましたが、明治32年町村制施行に際し近隣市町村に分割払い下げの決定で、野幌の原始林は存続の危機に遭遇しました。しかし北越殖民社の関矢孫左衛門は「原始林を失うことは水源を失うこと。環境の激変を招き開拓民の死活に関する一大事」として直訴団を結成し、上京する北海道庁長官を追って函館で「撤回」を得たというエピソードがあります。

このように、野幌の森林を大切に思う人々の保護の手を受けて、野幌森林公園の森林は世界的に貴重な状態で保全されているのです。

野幌小学校でのとりくみ

私が森林と関わりを持つようになったのは、そんな野幌森林公園を背後に持つ江別市立野幌小学校に勤めた時からです。開校110周年を迎えた野幌小学校は江別市内全域から通学できる特認校で「愛林愛鳥の学校」でもあります。全校児童105名、自然の好きな子どもが入学と同時に団員となる「愛林少年団」も2006年で35年目を迎えました。開拓の先人達の苦労を学び、地域の人々と共に森林を守り、育てる活動もますます活発になっています。

そのひとつには野鳥のための餌づくりとしてヒマワリやトウモロコシを栽培していたり、または森林ボランティアとして野幌森林公園のゴミ拾いや公園内の看板作成と設置などを行ったりしています。

そして、何より画期的なのはカリキュラムの一部として全校児童で「森の日」と位置づけた森林学習を行っているということです。この学習では、森の先生（林業技士会）に案内人となっていただき、観察活動をしたり、平成16年には台風の風倒木被害の調査活動をし

たり、この風倒木被害箇所の植栽活動をしたりしています。これ以外にも各学年や各ブロック単位でも林内学習として四季ごとに森林内の観察や、冬には歩くスキーと動植物の観察・調査などさらにここ数年では、高学年の学習で酪農学園大学の学生さんと共同で林内の昆虫や「原の池」での生物調査も行うなど、さまざまな学習の場として野幌森林公園を利用し、森林とたっぷりと触れ合っているのです。

森林で育てたい「感性」

子どもたちは、森の日が待ち遠しいし、森に入るのが大好きです。だって森は心が落ち着くし、たくさんの発見があるからです。森に入ると探求心が躍動し、子どもたちの眼が輝きます。実際、森には樹木から出るフィトンチッドという物質が溢れています。フィトンチッドは頭の回転が良くなり、発想を豊かにすることで知られています。そして、森林は豊かな感性を育みます。感性は教育の分野ですが、教科では教えることはできません。でも、育てることのできるものなのです。感ずることが感動につながり、豊かな感性となり、子どもが変わることにつながります。たとえば、「この花はきれいだと感じなさい」と教えられても分かるものではありません。花がきれいだと感じる心「感性」は、多くの人間関係の体験や自然とのふれあいの中で育ちます。特に自然の中、とりわけ森林の中では、人は五感をフルに活動させるので感性はとても良く育つのです。私は野幌の森林の中でそうした子どもたちをたくさん見てきました。

「本物」が育てられる「想像力」と「創造力」

もうひとつ、森の中では、図工の材料や、図鑑や教科書で知ってはいたけれど見たことのない物の本物を見ることができます。そして葉っぱをはぐると色々な興味深い虫が出てきます。さまざまな面白い昆虫は、ムシキングがなくても、デパートに行かなくてもたくさん見ることができるのです。森の中では虫も木も草も、なにもかもが違う形をしていて、子どもたちの興味や想像力を引き立てます。図鑑で調べて実物を見たり、面白い形の自然物からは創作意欲を刺激されます。森林は好奇心や想像力の宝庫でもあります。

森林という場で教育者が感じたこと

子どもたちを森林に連れて行くと、瞳が輝き、足早に歩き出します。足許、樹木の幹、枝先、小鳥のさえずり、植物の色と香り等々、溢れる発見があるから話なんかしていられないのです。喧嘩をしている暇もありません。ゆっくりしていられません。そして発見したことや、分かったことをみんなにどんどん話してゆくのです。大人は、これを聞いてあげることが大切です。

アスファルトの道では、暑くて歩くのも嫌になることがあります。森は涼しくて鳥や虫の鳴き声で爽やかな気持ちにさせてくれます。特に朝の森は格別です。朝に森を歩いたり走ったりすると朝食もおいしいし、たくさん食べることができるようになります。学校の勉強も集中してよく頭に入るようです。昼の給食でも好き嫌いしないで何でも食べてくれます。これを続けると健康に良いし、体力もつきます。

小学校では、パソコンを教えるよりも森でのびのび遊び、学んだ方が「逞しく生きる力」を身につけた子どもが育つと思います。そして、助け合う心や思いやりの心も育むのです。森で道徳教育なんて、最高に効果が上がるのです。森に連れて行くと子どもたちの争いも少なくなります。「森」って教育の場の王様なのです。

お金がないと遊べない遊園地やデパートに出かけるよりも、親子で森林に行ってふれあいませんか？森にでかけて親子のふれあいと家族の絆を深めて欲しいと思います。森で新たな発見と森の良さを再認識して欲しいです。

私は「森」の良さを子どもたち、地域の人々から学びました。いつも「森林万歳」「森ってすばらしい」「森よ、ありがとう」と心から叫び、これからも「森の良さ」を訴えていきたいと思います。

澁谷 重昭　江別市立野幌小学校 校長

昭和23年に札幌市で生まれ、以来石狩管内を離れない、生粋の道産子先生。教諭をする傍ら、石狩管内の3校でミニバス少年団の監督やコーチ、全道ボランティアセミナー等の発表や執筆を精力的に行う。野幌小学校へ赴任してからも、野幌森林再生プロジェクト委員や、江別南地区排水機場設置環境情報委員、そして本事業である森林環境教育事例集作成委員などを受け持った。